

現状と課題

- <4年生>
- ・R4市学力・学習状況調査の平均正答率については、国語が市平均より1.9ポイント低く、算数が市平均より4.8ポイント高い。
 - ・文字が乱雑であったり、ノートを書くことに時間がかかったりする児童が目立つ。
- <5年生>
- ・R4埼玉県学力・学習状況調査の学力レベルは、国語5-B、算数5-Cであり県の平均を下回っている。
 - ・スクラム対象児童について、R4埼玉県学力・学習状況調査における学力レベル平均は、国語4-B、算数4-Cであり、どちらも学年全体平均を下回っている。
 - ・学習に関して、協力を得られない家庭が多い。

現状と課題をもとにした仮説

- ア 対象児童に係る仮説
- 「わかった、できた」という喜びを体感させ、学習意欲を高めれば、児童の学力を向上させることができるであろう。
 - 一人ひとりの学力の実態を把握し、つまづきを解消することで、児童が意欲的に授業に取り組みるようになり児童の学力を向上させることができるであろう。
- イ 学年全体に係る仮説
- 一人ひとりを生かす学級経営を進め自己肯定感や自己有用感を高めることができれば、学習意欲が高まり児童の学力を向上させることができるであろう。
 - 授業改善を進め、教科の系統性を意識した問題解決的な学習を充実させれば、児童の学習意欲が高まり、児童の学力を向上させることができるであろう。
- ウ 学校組織に係る仮説
- 校内研修や学力向上プランなどと連動し、統一感をもった取組を行えば、児童の学力を向上させることができるであろう。

事業実施報告

- 5月10日 埼玉県学力・学習状況調査
- 5月12日 第1回校内スクラム会議
- 6月26日 第2回校内スクラム会議
- 7月19日 第3回校内スクラム会議
- 9月13日 各種調査の分析
- 10月20日 第4回校内スクラム会議
- 11月2日 スクラム訪問
- 12月13日 第5回校内スクラム会議

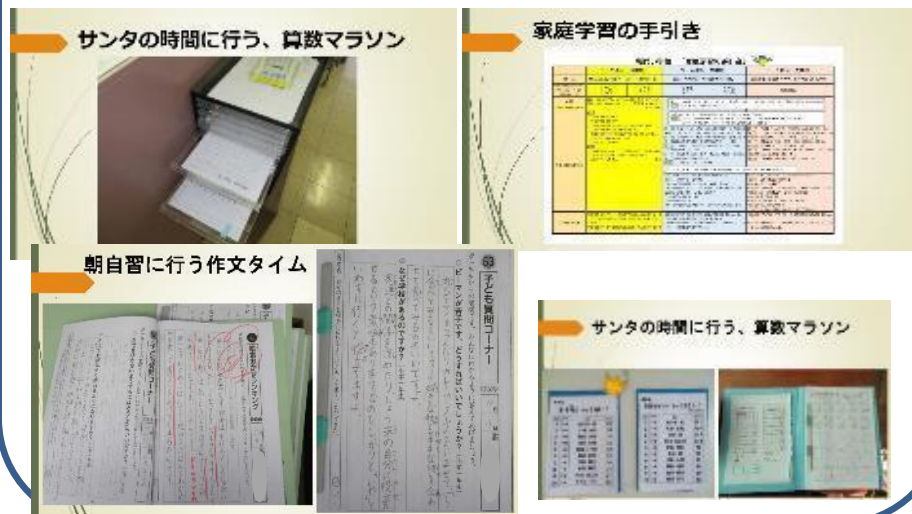
仮説をもとにした取組内容

研究のグランドデザイン



取組① 学習の土台づくり

基礎的・基本的な知識・技能定着のための児童自身の課題に応じた反復学習



取組② 授業改善

「〇〇っ子の学びを支える授業の5か条」の徹底

- ・「第2条 児童生徒が自分で考える時間を設ける」
- ・「第3条 児童生徒が表現と交流をする場を設ける」に重点を置いた授業設計
- ・ICTの効果的活用（考えの表現や交流の場面での活用）
- ・学習規律の徹底
- ・継続的な学び方の指導（ノートの書き方、考えの伝え方）

〇〇っ子の学びを支える授業の5か条

～主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～

- 第1条 学習課題(めあて)を明らかにする
- 第2条 児童生徒が自分で考える時間を設ける
- 第3条 児童生徒が表現と交流をする場を設ける
- 第4条 学んだことを活用する場を設ける
- 第5条 学習のまとめと振り返りの時間を設ける

総務課 課外活動



仮説をもとにした取組内容

- 取組③ 指導体制の充実
単元や学習内容に応じた指導体制
(1) チームティーチング
(2) 等質で分けた少人数指導
(3) 習熟度別少人数指導
(4) 取り出しによる個別指導

4年生 算数 習熟度別少人数指導

習熟度別	人数	クラス数
1	10人	1クラス
2	10人	1クラス
3	10人	1クラス
4	10人	1クラス



取組④ A寺子屋（授業外の学習支援）

- ・ 業間休み等に、希望者を対象とした授業外の学習支援「A寺子屋」を実施
- ・ これから学習する単元に関わる既習事項の復習など
- ・ 新しい単元の学習前に行うレディネステストなどをもとに、つまずきが見られる児童への声掛け



非認知能力・学習方略の 振り返りシート



現時点での成果

成果① 令和6年度埼玉県学力・学習状況調査

【4年生（令和5年度）】

<県平均正答率との差>

令和5年度 4年生	令和4年度	令和5年度	令和6年度
国語		-3.7%	+5.9%
算数		-3.0%	+3.1%

【5年生（令和5年度）】

<県平均正答率との差>

令和5年度 5年生	令和4年度	令和5年度	令和6年度
国語	-8.1%	-0.4%	-1.0%
算数	-6.2%	-1.0%	+0.7%

<学力を伸ばした児童の割合>

令和5年度 4年生	学力を伸ばした児童の割合	
	A小	県平均
国語	82.4%	67.0%
算数	64.7%	56.1%

<学力を伸ばした児童の割合>

令和5年度 5年生	学力を伸ばした児童の割合	
	A小	県平均
国語	36.5%	46.8%
算数	60.3%	54.7%

成果② 学習に取り組む姿勢

・担任がT2となることで、個々の児童に細やかな声掛けなどを行うことができ、学習規律が徹底され落ち着いて学習を進めることができるようになった。

・「A寺子屋」の取組により、前学年までの既習事項の復習を手厚く行うことができた。それにより、児童が自信をもって前向きに、学習や単元テストに取り組めるようになった。

成果③

非認知能力・学習方略についての成果

・学習方略を意識させる取組（テストに向けた学習計画表）により、計画的・自主的に家庭学習に取り組む児童が増えた。

・非認知能力・学習方略に関する意識調査（本校作成）では、すべての項目について8割以上の児童が「できるようになった」と回答した。

成果④生徒指導面での成果

○問題行動の減少

	令和4年度 (4年生時) [4月～3月]	令和5年度 (5年生時) [4月～12月]
校内生徒指導委員会における 問題行動の報告件数（現5年生）	31件	7件

○不登校傾向児童の欠席日数の減少

不登校傾向児童の 欠席日数 遅刻日数	令和4年度 (4年生時) [4月～3月]	令和5年度 (5年生時) [4月～12月]
児童A	欠席53日 遅刻92日	欠席28日 遅刻27日

成果⑤ 校内他学年への横展開・広がり

「指導体制の充実」など、スクラム事業での成果を受け、教科担任制の導入など他学年でも同様の取組を行うようになった。

課題及び今後に向けて

・2年間のスクラム事業を通して、学力低位の児童への支援を手厚く行い、その成果が各種学力・学習状況調査でも見られるようになった。また、該当学年全体の学力向上を達成することができた。今後は、スクラム事業の取組を適切に取捨選択しながら学校全体で継続し、さらなる全校児童の学力向上を目指したい。